

2011年の 滋賀県サルモネラ動向調査結果について

サルモネラはヒト、動物の腸管内、カメなどの爬虫類、さらに下水や河川水など、広く環境中に分布しており、食中毒およびヒト、動物の下痢症を引き起こす菌として広く知られています。本県のサルモネラによる食中毒発生状況は、1990年代までは発生件数、患者数ともに上位を占め、1999年をピークに発生件数は減少傾向にあるものの規模が拡大しやすい傾向にあり、依然として重要な食中毒菌です。

本県では、食中毒予防対策のひとつとして、県内病院、登録衛生検査所、大津市保健所および当所において、散発下痢症および食中毒事例によりヒトから分離されたサルモネラの血清型を調査し、流行の推移を把握する「サルモネラ動向調査事業」を2000年より実施しています。

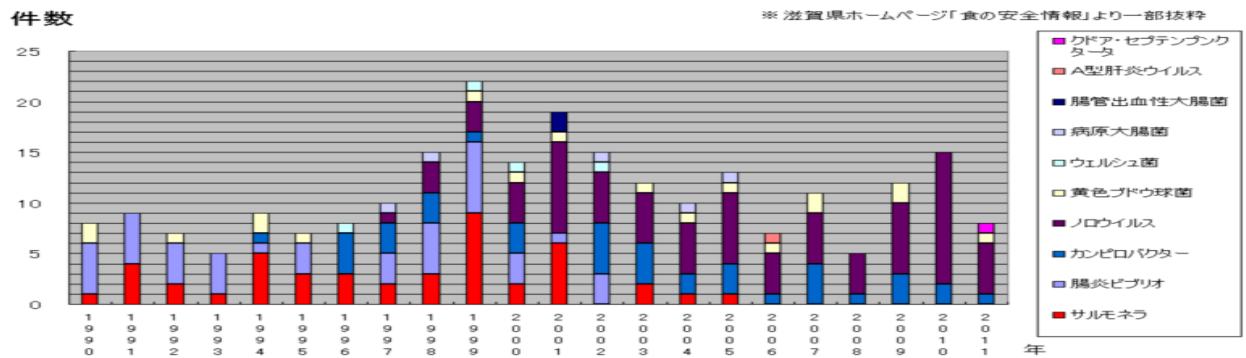


図1 年次別 細菌・ウイルス性食中毒発生件数

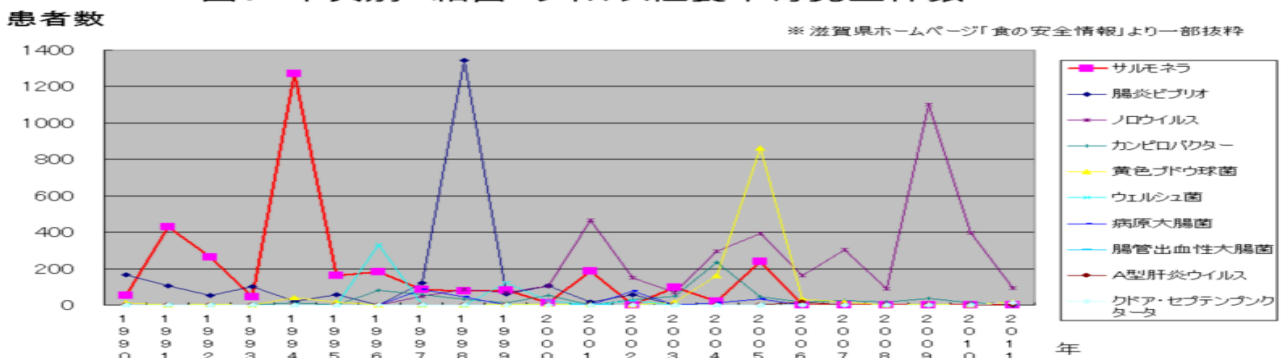


図2 年次別 細菌・ウイルス性食中毒発生患者数

昨年の調査結果について

2011年中に、散発下痢症由来108株、食中毒事例由来1株の計109株の調査を行いました。その結果、血清型は *Salmonella Saintpaul* (サルモネラ・セイントポール) が23株で最多となり、それまで最も多かった *Salmonella Enteritidis* (サルモネラ・エンテリティディス) を上回りました。

7月に特定の登録衛生検査所においてサルモネラ・セイントポールが集中して分離され、過去に本県において同様の事例がなかったことから、5月から10月に県内で分離されたサルモネラ・セイントポール感染者20名由来20株について、パルスフィールド電気泳動(以下PFGEという)による細菌学的疫学解析を行ったところ、9株が同一のPFGEパターンを示しました。この9株は、A市の6名、B市の2名およびC市の1名から分離されたサルモネラ・セイントポール株であり、B市の2名は家族でした。これらの結果は、何らかの同一起源による散発的集団発生食中毒の可能性が疑われるものであり、健康被害の拡大の防止と発生原因の究明のため、保健所などの関係機関に迅速な情報提供を行いました。今後、さらに同血清型の動向に注目していくことが必要と考えます。

本県では2006年よりサルモネラ食中毒の発生はありませんが、引き続き動向調査を進めることにより、散発的集団発生の早期探知等、食中毒予防対策に役立てていくこととしています。